

津田左右吉物語

第17回

著作と闘病生活

規則正しい生活を続けていた左右吉は、平泉から武蔵野市境に移った直後発病しました。このときは吉祥寺の病院に入院。ここでの日々は、病氣と闘いつつ研究一途に明け暮れた生活で、何度かの入院を繰り返しました。

そのころ、弟子の栗田氏が、左右吉の病状について主治医にくどく質問したところ「実は津田先生の病氣は悪性のものである」と知らされました。

昭和30年10月、飯田橋の通信病院で手術を受け、早稲田大学の学生をはじめ関係者の輸血によって危機的状況を脱し、翌春退院しました。しかしその後再発し、宅診や通院を繰り返し、注射によって症状がおさえられていました。



昭和35年5月、美濃加茂市名誉市民となり帰郷したときの写真を見ると、顔がむくんで、病状が一段と進行している様子がうかがえます。その間にも著述、著作は続けられ、逝去する昭和36年まで毎年刊行し、世の人を驚かせました。



▶昭和31年10月、武蔵野市の自宅にて